

旧国分寺村（現在の東元町・西元町周辺）は天平年間からの歴史的な地域であり、恋ヶ窪村（現在の東恋ヶ窪・西恋ヶ窪周辺）は、街道沿いの宿場として鎌倉幕府時代に栄えた集落です。

江戸享保（1715～）年間、いわゆる享保の改革により武蔵野新田開発が始まり、現国分寺市域にも新たに八新田が開かれました。これらの新田開発は、土地の豪農や有力者が願人となり、多摩地区の青梅、武蔵村山、東大和、五日市方面からの入植や谷保、府中方面からの農村の拡大という形での入植により進められました。

### （１）旧国分寺村

旧国分寺村の区域は、現在の東元町、西元町、本町、南町、泉町などとなります。村の中心は、現在の国分寺街道の府中市との市境付近でしたが、江戸時代になり玉川上水からの分水が引かれると元町用水（お鷹の道沿い）と野川沿いも田んぼが作られ、小金井の貫井村などとともに大きくなって、村の中心が崖線沿いに移っていったものと思われます。延宝検地（1678）での田畑比率をみると、田んぼ15.9%、畑82.3%、屋敷地1.8%となっています。寛永2年（1749）の人口は、75戸、309人ほどでした。

それ以前にも田畑の拡張の試みがされましたが、野川の堰き止めや流路変更が難しく失敗したようで、「押切間」という小字名が、野川の最上流の橋の名「押切橋」にその名残をとどめています。また「殿ヶ谷戸」や「長谷戸」（古くは、はせど、ではなく、ながやと）など、谷戸の名など、地形から名づけられた地名も多く現存しています。

畑での主な作物は、麦、大豆、野菜などでした。

また、当地域は尾張徳川家のお鷹場（鷹の餌場）に指定され、鳥獣捕獲の禁止など一般の利用制限もありました。昨今では、東元町、西元町の崖線下の清流（元町用水）沿いに、遊歩道が整備され「お鷹の道」として国分寺市を代表する名所として都民に親しまれています。なお崖線下の湧水群は「お鷹の道・真姿の池湧水群」として環境省選定の名水百選に選ばれています。

鎌倉時代になると、鎌倉と関東各地を結ぶ道路の整備が進みましたが、当地域には、東山道武蔵路と道筋の重なる鎌倉街道「上道」（かみのみち）が通っていました。

用水は、玉川上水からの分水として、明暦3年（1657）に恋ヶ窪村、貫井村とともに願い出て国分寺村分水として敷かれています。国分寺村のお寺は、江戸時代初期に建てられた現在の国分寺で、鎮守としては、八幡神社があります。

### （２）恋ヶ窪村

恋ヶ窪村の区域は、現在の東恋ヶ窪と西恋ヶ窪となります。

恋ヶ窪村も江戸期よりも前の歴史については不明の部分が多く、恋ヶ窪本村、伝恋ヶ窪

廃寺や阿弥陀堂墓地の存在を示す言い伝えや、史料はほとんど残っていませんが、畠山重忠の恋物語伝承からも宿場として栄えていたことがうかがえます。その後元弘3年

(1333) 新田義貞の鎌倉攻めの際、武蔵国分寺とともに周辺が焼かれ、荒廃したと伝えられています。ちなみにお寺は東福寺、鎮守は熊野神社です。熊野神社も新田義貞の兵火で焼失し、その後も何度かの焼失の後、慶長2年(1597)に再建されたとされています。伝承によれば、東福寺を含め、集落が再度できてきたのは元禄年間(1688~1703)とされています。

いずれにしても江戸時代には、江戸に通じる東西道路が主流となり、鎌倉街道の重要性は薄れていったものと思われます。

「江戸名所絵図」を見ると、熊野神社の北に「傾城松」があり、今の東福寺周辺とは異なります。更に阿弥陀堂、伝恋ヶ窪廃寺も確認されていません。

恋ヶ窪村は、本村が延宝期(1679)に開発され、続いて山谷(サンヤ=熊野神社通り北側、東恋ヶ窪3、4丁目)、新田(現在の連雀通り南側、東恋ヶ窪2丁目)と漸次開発されました。

したがって、現在連雀通り~ガイシ通りは新田の田畑の面影が少し残っているのに対し、府中街道(川越街道)沿い東側の西恋ヶ窪1、4丁目は道も複雑な形であり、升目に区画された土地が非常に少ないのが特徴です。

史料によればこの村の戸数、人口は延宝6年(1679)18戸 約90人、元文元年(1736)22戸 約110人、現在の東福寺周辺の集落が中心となっています。明治6年(1873)には54戸 317人となっています。用水は、恋ヶ窪村分水を利用していました。

### (3) 本多新田

本多新田の区域は、現在の本多1丁目から5丁目までとなります。

高札所(幕府の公式の掲示)があったことから、この地域は「札ノ丘」という小字名が残されていました。また、特殊な小字名では、この新田の「飛び地」で現在の早稲田実業学校のあたりが、「なだれ上」と呼ばれていました。明治19年(1886)の地図を見ても、人家はなく、樹林地になっていますから、土砂崩れが多い崖地だったのでしょうか。他に、「上ノ井」「中ノ井」「下ノ井」という多分井戸を中心とした小字名がありました。

この新田は、享保9年(1724)旧国分寺村の本多儀衛門・仲右衛門兄弟が開き、国分寺村、野火留(止)村、檜原村などからの入植者が、江戸街道(連雀通り)北側に移住、開発が開始されました。

本多家は宝永2年(1705)に、佐源太が国分寺村の年番名主として文書に表れて以後、一時期を除き国分寺村の名主を明治5年(1872)まで務めています。また、享保9年(1724)に開発が始まった本多新田の名主も兼ねていました。

新田の中心となるお寺と鎮守は、享保11年(1726)に現在の西元町にあった 祥応寺

(黒鐘公園の北、伝鎌倉街道沿い)を引寺し、同地内に八幡神社も建立し、村(新田)としては同12年から正式に発足しています。

用水は、貫井用水があり、今の連雀通りに引かれていました。

昭和3年(1928)の「多摩湖鉄道」(現在の西武多摩湖線)が旅客用として開業した時には、連雀通りとの交差点には「東国分寺駅」、小平市内になりますが玉川上水との交差点南側には「桜堤駅」などができ、堤は桜見物客に沸いたようです。

#### (4) 戸倉新田

戸倉新田の区域は、おおよそ現在の戸倉1～4丁目、東戸倉1～2丁目、日吉町1～2丁目、内藤2丁目の一部および富士本1丁目となります。小字名では、用水で分けられた地という意味ではと思われる「堀分」、(現在の窪東公園付近)市役所を中心にしたあたりの「窪東」「窪西」、用水が分岐する萬福寺のあたりの「沢又」そのほか「稲袋」などがあります。

この新田は、享保14年(1729)に、戸倉村(現在のあきる野市)の郷左衛門が願人となり開発が始まりました。

江戸道(戸倉街道)、中原道(なかっぱらみち、戸倉神社北)沿いに用水が引かれ、敷地はそれに沿って垂直に区画されたため、南東に向いた短冊型の地形になっています。

入植(宝暦11年(1761))の戸数は、桧原村から21戸、狭山(現在の東大和市)から4戸、新田内分家7戸の計32戸となっています。

お寺と鎮守は、開発の時期から少し後になりますが、お寺は名主の郷左衛門が桧原村から萬福寺を引寺、鎮守は、戸倉村から山王権現(現在の戸倉神社)を勧請しました。

用水は、玉川上水からの分水の一つである戸倉新田分水(野中新田分水)が引かれており、これを利用していました。ちなみに戸倉新田分水は、戸倉通りの途中で二又に分かれ、戸倉通り南側と戸倉神社の通り(中原道)の南側を通り、市役所の西側から、さらに南下し、JR武蔵野線と西武国分寺線の交差する地点をまたぎ、恋ヶ窪村分水水に流れ込んでいました。

#### (5) 野中新田

野中新田の区域は、おおよそ現在の北町、並木町、新町、高木町、そして戸倉2丁目・日吉町3丁目の一部となります。

大字名を野中新田六左衛門組と呼ばれたこの地域は榎戸新田と交錯するように土地が分かれており、谷野本、谷野本北側、谷野口東、新道附、高木北側、高木南側、南台などの小字名があります。

享保7年(1722)幕府の新田開発奨励直後に、上谷保村の農民7名と江戸の商人4名の開発願書が提出されました。当時の計画によれば、開墾地は現在の立川市、小平市、西東京市、国分寺市にわたる広大なスケールでした。

その後幕府より開発に伴う冥加金250両の上納を命じられましたが、用意することが出

来ず江戸の商人（上総《現在の千葉県》の出身）野中屋善左衛門に出資を依頼しました。そこで善左衛門の苗字から野中新田と称するようになりました。開発当初より開発地が広大だったために「北野中」「南野中」に分かれており、のちに同新田が組に分かれる母体となりました。

『新編武蔵風土記稿』によれば「武蔵野新田の中程なるが故に、かく名づく云々」と名前の由来を書いています。前述の説の方が有力です。

この野中新田は開発地が広がったこと、願人が農民・町人の混合であったことなどから当初よりまとまった新田村とはいえなかったようです。また善左衛門自身が商人であったため、開発地を出百姓に売り渡すなどの商業活動もしていました。

享保 17 年（1732）には、野中新田の三組（与右衛門、善左衛門、六左衛門）と鈴木新田の四組に分かれました。現在の国分寺市にあたる地域は、野中新田六左衛門組と呼ばれるようになりました。

名主六左衛門の詳細は不明ですが、やはり江戸の商人であったようです。村役人は名主六左衛門家が代々務め、村の戸数は明和 5 年（1768）47 戸と記されています。

お寺と鎮守は、野中新田は開発の発起人の一人であった円成院住職大堅により上谷保村の円成院を引寺することは開発当初から予定されていました。さらに長流寺を菩提寺とし毘沙門天王を村の鎮守とすることが取り決められていました。

享保 9 年（1724）にはその円成院が北野中に移り、翌年には毘沙門天が鳳林院（南野中）の境内に安置されました。開発の許可が下りた直後からお寺や鎮守を村に設ける動きがあったこととなります。

享保 9 年（1724）玉川上水の分水が開削され、現在の五日市街道沿いの住民の飲み水が確保されました。し

## （6）榎戸新田

榎戸新田の区域は、はおおよそ現在の北町、並木町、新町、富士本二丁目、西町の西側半分と東戸倉の一部となります。大字名を榎戸新田とし、上北側、中北側、下北側、上南側、中南側、下南側、富士本、弁天、ハケ通りの小字名があります。地図上で見ますと散らばった、入り組んだ地域（野中新田六左衛門組との土地の交換や飛び地）であるという印象です。

当初大丹波新田と呼ばれていたこの新田は、多摩郡大丹波村（現在の奥多摩町）の名主家から分家した覚左衛門が開発したのが始まりとされています。その後この覚左衛門の苗字をとって新田名を榎戸（榎木戸）新田としました。なおこの新田は野中新田六左衛門組との村域(耕地)の入り組み方から見て、野中新田六左衛門組から何らかの理由で分村したもので、分村は享保 15 年（1730）と考えられます。

この村の戸数は宝暦 4 年（1754）には、37 戸となっています。

また、出身地は宝暦 11 年（1761）35 戸の内、大丹波村から 8 戸、大久野村(現在の日

の出町)6戸など西多摩郡から24戸、砂川村から6戸その他となっています。村役人は名主榎戸家が代々務めました。榎戸家は村の面積の4割を所有する大きい農家で、奉公人を含めると15人の大家族は、他の新田ではあまり見ることがない規模でした。

お寺は妙法寺でももとは小川村（現在の小平市）にあったものを榎戸家の墓所に移したものです。鎮守は愛宕神社で、小丹波（現在の青梅市）にある同社を分社したものです。妙法寺には新田経営の危難を救った川崎平右衛門、伊那半左衛門両代官への謝恩塔があり、当時の名主榎戸源蔵はじめ村民が建てました。

用水は、享保14年（1729）砂川用水から分水して飲水として使いました。

#### （7）内藤新田

内藤新田の区域は、内藤1丁目～2丁目の一部、日吉町1、3～4丁目あたりとなります。小字名は「はげ上」「府中道」「久保」と点在する「武蔵野」で構成されています。またこれらの小字名は、新田の成り立ちとの関連から、府中本宿村の小字名の「はげの下」「本宿武蔵野」（現在の府中市武蔵台3丁目）と関連のあることが分かります。

さて、この新田は、享保9年（1724）に本宿村小野ノ宮（現府中市）の内藤治助が開発を願い出て、小野ノ宮新田として開発が始まり、享保14年（1729）黒沢村（現青梅市）の神山平左衛門らが入植、本格的に開発が進められました。

同21年（1736）までに、神山平左衛門に続いて、高杉六兵衛、本橋庄左衛門、中村伝兵衛、山崎与五兵衛、森田左衛門の各家も入植し7戸となり、新田名も内藤新田と改め、正式に村として発足しました。なお、内藤治助は移住せず、治助の子重政から移住しました。その後の入植者には、大野清兵衛、栗原四郎左衛門、田中三郎右衛門、市倉久兵衛、中村市右衛門、森田佐左衛門、新藤喜左衛門などの名がみられ、出身地は上記のほか、軍道村、養澤村、入野村（現あきるの市）、堀口村、川辺村（現所沢市）などで、江戸時代末までに計24戸が誕生したとされています。

そして、村の成立に欠かせなかったお寺と鎮守のうちお寺は、現国分寺を菩提寺とし、鎮守は、神山家が勧請した近江の日枝山王宮（明治2年内藤神社と改称）を鎮守としました。

また、水事情は他の新田と大きく異なっていました。他の新田が玉川上水からの分水を利用してのに対して、内藤新田では、用水が引かれておらず、2か所の井戸に頼っていました。そこで井戸替えなどで一方の井戸が使用できない時には、他方の井戸を使用していたため、この間をつなぐ道を「水汲道」と呼んでいました。

#### （8）中藤新田

中藤新田の区域は、南北に細長い現在の西町の東側半分あたりとなります。大字名を中藤新田、小字名をはげ北、はげ南と呼び、ハケ（国分寺崖線）の上と下に住居、畑がありました。

この新田は中藤村（現武蔵村山市）佐兵衛組名主内野佐兵衛によって享保 12 年(1722)頃開発が始まったと思われますが、開発の詳しい経緯は不明です。

開発当初は中藤村新田と呼ばれ、佐兵衛組、源蔵組に分かれていました。享保 18 年(1733)には中藤新田として史料に名前が出てきます。

当新田は地味が良く、他の新田より比較的順調に開発が進んでいたようです。お寺は、中藤村観音寺にあった寺を元文元年（1736）引寺して、観音寺としました。神社は同時に神明社を勧請しました。また、お寺も独自に開発を行い「百姓観音寺」として検地帳に記載されています。なお、観音寺はもともと滝山城（八王子市）の守護寺として中藤村に建立されたと言われています。

中藤用水は玉川上水から分水しました。分水口は砂川新田（現在の立川市）の中であり、後年この分水口の樋が腐ったために中が土砂で埋まり、取水量が減少してしまいました。そこで新しい分水口を探し出しましたが、それは途中で他の分水路と交差することが分かりました。そのために水路を掘り下げて一部に胎内掘（トンネル）を作りました。

胎内堀の長さは 225 間（約 409m）深さ 6 尺（約 1.8m）内法 3 尺（約 0.9m）、トンネルには約 3mおきに堅穴を開け、中の掃除がしやすいようにしました。

現在もこの遺構がハケ上に一部残っています

#### （9）平兵衛新田

平兵衛新田の区域は、現在の光町 1 丁目から 3 丁目と飛地の内藤 2 丁目、日吉町 2 丁目の一部にあたり、東は榎戸新田、西は、上谷保新田、中藤新田、南は国立市、北は野中新田六左衛門組となります。

この「平兵衛新田」の地名は、昭和 4 1 年（1966）まで用いられた大字名で、ハケと呼ばれた国分寺崖線に沿って、大半の村落はハケ下に位置し、小字名は、ハケ通り、ハケ下、ハケ、等に反映されていました。

この新田の開発は、く享保 7 年（1722）、の新田開発奨励の高札により始まりました。『新編 武蔵風土記稿』によれば、「開発の経緯は享保の中、上谷保村の農民平兵衛といえるもの開きしなり、因って村名とせり」とあります。平兵衛さんは、開発主として開発地を割り渡されたが、その開発地を出百姓に分与するといった新田経営を行っただけで、自らはその新田地に移り住まなかったと言われています。

また、国分寺市史記中巻では、開発は享保 14 年（1729）現在の東大和市芋窪から入植した次右衛門、勘左衛門、甚右衛門らによって始まったとされています。この平兵衛さんの人物像については、その所在、屋敷、子孫等不明な点が多く、「平兵衛新田の今昔」のなかではミステリアスにとりあげられています。今では「平兵衛樹林地」にその名をとどめています。

用水は、ハケ沿いの中藤新田と同じく、玉川上水からの分水を飲用として利用していました。

平兵衛新田のお寺は、中藤村（現在の東大和市）から引寺されたという「観音寺」で、

鎮守は「稲荷神社」です。この地域は、その地形から坂が多くあります。

稲荷坂は、高木町方面から来る道で新道坂と呼ばれていました。交差点改良工事で、坂の横にあったお地蔵さんは、観音寺に移され、また、用水に架かっていた、太鼓橋は稲荷神社に移されました。

捨場坂は、あらゆるものを捨てたことから捨場坂とよばれました。別の伝承もあります。

鍛冶屋阪は、稲荷神社から第二小学校にむかう坂道です。江戸時代諸井家が鋏、すきなど作っていた、鍛冶屋だったからと言われていました。

#### (10) 上谷保新田

上谷保新田の区域は、現在の西町一丁目あたりとなります。

延享2年(1745)、中藤新田の村人が「分村」してここを開きました。

この村は、上谷保新田のほかに、上谷保村新田、上谷保村新田中藤村弥左衛門持、通称五軒家などと呼ばれていました。

名主は、中藤新田の名主が兼務していました。

お寺は、「観音寺」で、鎮守は、平兵衛新田と同じ「神明社」です。

用水は、榎戸分水と砂川用水が途中まで来ていますが、かなり離れているので、主には井戸を利用していました。

以上